

A

2024

JUNE

[第2013回]



神秘的で物憂げな、わが道をゆく

アレクサンドル・スクリャービン

Alexander Scriabin (1872–1915)

幼い頃からピアノの才能をみせたスクリャービンは、モスクワ音楽院へと進学。さまざまな音色、細やかなペダリング、レガート奏法など、繊細なピアノイズムで高く評価されていた。作曲家としては、ショパンの影響を大きく受けながら、オカルティズムや神秘主義にのめり込み（超自然的な力を信じたり、自分と神とを同一視したり）、独特な作風を確立。晩年には神秘和音、色光ピアノなど独自の世界を拓けた。

切磋琢磨する仲間

モスクワ音楽院での同級生にはラフマニノフがいた。2人は音楽院入学前から、厳格な師ズヴェーレフのもとで共に学ぶピアニストの卵だった。小柄なスクリャービンは手が小さく、1オクターヴにもなかなか届かなかったという。ピアノの卒業試験はラフマニノフが1位で、スクリャービンが2位。新聞は2人のライバル意識を煽ろうとしたが、友情は変わらなかった。

手が大きいラフマニノフと、
手が小さいスクリャービン
イラストレーション: ©IKE

